

歌舞伎女形の芸におけるボディラングエイジについての一考察

齋藤 潤

1-1 目的

本研究では、女形が、いわゆる女性の典型を具体的に身振りの上でいかにして表現しているかを明らかにする事を目的とする。

1-2 方法

典型的表現には、共感と理想化の二要素があるとされている。そこで本研究では、歌舞伎役者による芸談を主な資料として、そこに述べられる事から、以下の三点を検討する。

- ① 女形の身振りがどのようなボディラングエイジとして機能しなければならないか。
- ② 役柄に表現されている内容
- ③ その内容を伝えるボディラングエイジとして、身振りを機能させる為の工夫

2-1 伝達性があり、且つ美しい身振り

歌舞伎に於いては身振りが非常に重要である。歌舞伎劇は、大別して舞踊劇とせりふ劇に分けられるが、せりふ劇に於いても身振りがせりふと同じくらいの優位性を持つ。石田は、「役者の身振りが物語りをする」と指摘し、身振りの重要性を強調している。^{注1)文献①P.18}しかし、その身振りをするに際しては、ただ働くだけではなく、美しく動かねばならない。つまり、歌舞伎の中で使用されるボディラングエイジは内容を理解させるだけでなく見る人の美的感覚を満足させなければならないのである。

従って、女形の使用するボディラングエイジには伝達性が備えられ(物語り)、且つ様式性(美しさ)が必要である。その意味では特殊なボディラングエイジと言える。この特殊なボディラングエイジをいかに作り、また使いこなすかが、女形の技量にかかっているとと言えるだろう。元禄の名女形、吉沢あやめは「あやめ草」の中で、實とかぶきと半分半分にするのが良いとしている。^{注2)文献②}

2-2 役柄に表現されるべき内容

歌舞伎は個人を表現するのではなく、個人の属する類型(遊女、姫等)を表現している。そしてそのような類型の特徴について述べた文献を見ると、その内容にはいくつかの共通点が見出されるように思われる。為永一蝶は歌舞伎事始で、「表をばでにし、裏に貞心あり」と述べているが、^{注3)文献③P.125}現代でも、その二面性は役の心として

伝えられている。

この二面は各々片方は女性なら誰にでもある一般的な要素であり、共感を与える要因となるのだが、両面を同時に満たすことは非常に困難である。その故に二面同時に備えた女性は理想化された女性となりえる。

では、そのような二面性を備えた女性像を表現するために役者達はどのような工夫をしているのだろうか。

2-3 身振りにおける工夫のポイント

最初に述べたように、女形の使用する身振りはまず美しくなければならない。男性と女性で、外見上最もはっきりとそのちがいが分かるのは、男性に比べ、女性は手首や指が細いこと、なで肩なこと、そして全体として丸みがあることが言える。従って、男である女形が外見上美しい女に見せる為には、まずその点を注意しなければならない。手首、指を細く見せる為には、観客から見える部分が少なければ良いわけで、身振りの間も手の甲や、掌を観客にたいしてできるだけ正面に見せないようにするといわれる。^{注4)文献④P.73}

また、なで肩に見せたり、丸みを見せるためには背中を使い方や胴体の方向が重要なようである。肘を脇にできるだけ付ける、肩胛骨同士を近づける、臀を出さない、といった事によって肩は撫で肩に見えるとされているし、^{注5)文献⑤P.308}女のやさしきを見せる為には、どんな場合でも胴体を正面に向けないこと、いくらか斜めにねじることがしばしば指摘されている。そしてその姿勢を維持するために、後ろを向いた時でも背中を緊張させ続ける事が必要である。河原崎国太郎は後ろを向いた時、身体をぎゅっとつめて、息を止めるようにしているという。^{注6)文献⑥P.184}

このように芸談の中には、手及び腰を含めた胴体についての記述が多く、女形の身振りにおいてまず注意すべき点として、この二つの部分が挙げられるようである。

以上いくつか注意されている点を上げたが、これらはあくまでも演技の前提であり、これだけでは美しいだけで肝心の内容が伝えられない。女形の身振りは、先に述べたように、二面性を備えた女性像を伝達しなければならない。つまり、美しい身振りをいかにしてそれを伝えるボディラングエイジとして機能させるかが、女形の真価が発揮される時であると言うことができる。

では、そのような使い方をするにはどのような点に注意すれば良いのだろうか。

日本人は、手の置き場や目のやり場を非常に重視する。また本来座って物事を処理する文化故に、胴体の動きが目立たないことが良しとされる。従って、歌舞伎の類型表現にも各々の類型に適した

手、目、胴体の位置が定められている。まず手について、座っている時、生娘は手を袖口に入れ、見せない事とされている。それが町娘になると片手を袖口からのぞかせ、姫になると両手を除かせる。^{注71)文献⑧}つまり、自分の周囲を畏れなくてよい立場になるに従って手が袖から見えて来る。では胴体についてはどうなっているだろうか。

胴体や顔についての注意をのべた口伝は非常に多い。特に注目すべきなのは、胴体のねじり、斜めの程度、胴体と顔のずれぐあいを厳格に指摘していることである。女形が胴体を斜めにねじるのは、そのことにより女らしさ、色気を出すためである。逆に男役に上体をねじることは禁物である。女役の中では、遊女や芸者は大きくねじり、さらに胴体を斜めに倒すこともある。女房や娘になると、いくらかねじりようにし、武家女房になると胴体はねじらずに足先なり顔なりを多少ひねるだけである。^{注81)文献⑨ PP.11-12}武家女房の中でも特に品位と強さを要求される千代萩の政岡は、胴体をねじらないで足だけを斜めに踏むと言うし、^{注91)文献⑩}それに対し色町の女は、座るのでも足の指を少し出すことで胴体をねじり、手をそこに添えてさらに斜めに傾ける。^{注101)文献⑪}即ち、胴体を真っ直ぐにする(正中線上に置く)事は、男らしさ、強い意志につながり、ねじる(正中線上で旋回)事は、女らしさ、優しさ、色気につながる。更に斜めに倒す(正中線からはずれる)事は、艶やかさや乱れにつながるという。最後に目については、昔から日本女性は対面する時に相手と目を合わさない事を良しとしてきた。それは「恥じらい」「はにかみ」とされ女性の美德であった。従って娘役や姫役は斜めに顔ごと目に向け、女房、年増となるにしたがって視線が上がる。^{注111)文献⑫}その目が相手を見る際に顔の正中線からねじれ、顔が動いてから目が動くというように間合いがずれると今度は「流し目」となり、艶やかさを含んだものとなる。芸者や遊女の目の動かし方である。

このように、女形が行なう身振りは役柄によって詳細に定められているのであるが、これは多くの女性を女形が観察した上で生み出された共通項であり、そのために、どのような観客がその身振りを見ても、それは確かに自分の周りの誰かが行なうような身振りであり、共感を持つことができる。

しかし、これだけでは舞台上に現われる女は共感できる女であるだけで、理想化されてはいない。これではまだ女形に要求されるボディラングエイジとして半分しか機能していない。では、以上の他にどのような要素が必要なのだろうか。

ここに述べた身振りの法則は歌舞伎の作られた時代の生活習慣に裏付けられている。これは女性が実際にしている身振りであると同時に、しなければならない身振りでもある。ところが、歌舞伎

の中の女達は、筋の展開につれてしばしばこの法則を崩すのである。常にはずかしげで下を見ていなければならぬ娘が恋しい人の前では遊女のように胴体をねじったりする。

この法則破壊により、女形は、その役柄の心の動きを伝え、さらに二面性も与えているといえるのではないだろうか。その結果として舞台上の女は観客にとって共感できる女から、理想化された女に変化すると思われる。傾城揚巻についての口伝で、揚巻は座って煙管を貰うとき、全てを新造番新に任せ、そちらを見てはならないとある。目を正面に向け、自分の世話を他人にさせて平然としていることで大傾城の品格が伝わるとされている。ところがその鷹揚な揚巻が助六の着物を自ら持って来ていそいそと着せかけることで、遊女である彼女が助六という恋人には特別の真心を尽くせることが伝わるのである。^{注121)文献⑬ P. 82}

以上のことから、女形の使用する多くの身振りでは、①手の位置、②胴体のねじり、倒し方、③目と顔が類型の表現のポイントとなって、写実的な身振りが出来上がる。それにより観客は自分のイメージ通りの女性を舞台上に見て共感できる。そして、その写実的な表現が崩される時、女形の身振りは理想化された女性像を表現するボディラングエイジとして機能しはじめると言うことができよう。

3. 結 論

歌舞伎女形の表現する女性像には、二面性があり、各々片面は誰もが備えているものであるのだが、両面を同時に満たす事は実際の女性にはほぼ不可能に近い。ここに共感と理想化の二要素が見られる。従ってこの両面の同時存在に女形の表現する女性像が典型といわれる要因があると考えられる。

そしてそのような典型を身振りで表現する為に、役者は実際の女性を観察する事で身振りの法則を発見し、更にそれを意識的に破壊するのだが、その際ポイントとなるのが、手の位置や動かし方、胴体、目の方向と角度、ずれの間合いであると言うことができよう。

主要参考文献

- 1 井口政治(筆録)六世尾上梅幸芸談集・梅の下風 演劇出版社 1958
- 2 石田一良 歌舞伎の見方 講談社 1974
- 3 河原崎国太郎 女形の道ひとすじ 読売新聞1979
- 4 芸能史研究会 日本庶民文化史料集成 第6巻 三一書房 1973
- 5 五世尾上菊五郎 他 日本の芸談 第一巻 歌舞伎Ⅰ 九芸出版 1978
- 6 戸部銀作 歌舞伎のみかた 第一法規出版 1973
- 7 中村芝鶴 役者の世界 木耳社 1966
- 8 平山蘆江 日本の藝談 改版 和敬書店 1949